

創作の源泉を語る ①

作家 宮本輝



宮本輝[ミヤモトテル]1947(昭和20)年、兵庫県神戸市生まれ。広告代理店勤務を経て、執筆活動へ。1977年「泥の河」で太宰治賞を、翌年「螢川」で芥川賞を受賞。ひたむきに生きる人間の姿を、鮮やかな人物描写と洞察で描き出す。『優駿』(吉川英治文学賞)『骸骨ビルの庭』(司馬遼太郎賞)など著書多数。2010年秋、紫綬褒章受章。1996年より、芥川賞選考委員

小説家の宮本輝さんは65歳。27歳から小説を書き始めてこれまで38年間、「泥の河」「螢川」など数多くの著作を世に出し続けています。この秋には、第二の人生に挑戦する50代の主婦を主人公にした作品が出版されます。タイトルは「水のかたち」。

「宮本輝さんの人生観はいつごろからどのように形づくられていったのか」「小説家とは」など、小説家・宮本輝さんの深部に迫るインタビューを2夜連続でお送りします。

今まで107、8冊を書き続けている。ある人から小説家は長生きしないとけなしい…年2冊のリズムを作りなさいと言われた。100編の長編小説を書き、世界一を狙っている。今65歳だから85歳まで年二冊づつ書きたい…サラリーマンに失敗し、自分には小説以外何の能力もない……。

50歳を過ぎた頃から「一字一字書き、それが30字になり、100字になり原稿用紙一枚になり、30枚、100枚になる…」と判った。書きたくない日も、かけない日も、とにかく書く。休むとそれでおしまい。書いているといつか流れに入っていく。このことを小説を書くことで知った。いやなことでもやっていると開ける。気づいていない人間の力、自分の力が出てくる。嫌な時でもそれをする。一つ一つの積み重ね以外ないのだ。

「水のかたち」は東京の下町、門前仲町で暮らす平凡な主婦の能勢志乃子(50代)が主人公。更年期になり覇気が無くなる。肉体的にも精神的にも関所が待っている50代。それを楽しく乗り越えていく小説を書いた。原稿は1280枚。

50歳代は起床転結の転に入った時、時に生きる希望が薄くなることもある。80歳を越えた田辺聖子さんに言われた。60、70歳は、はな垂れ小僧！その田辺さんは90歳を越えた人に80歳は、はな垂れ小僧…といわれたらしい。自分の考えていることは小さいと思った。

なんでも発酵するには時間がかかる。その人が経験してきたものが後に生きる。悪人はほっといても結託する。善人はもっともっと繋がらなければいけない。心の清らかなよき人の連帯を意図的に作っていく必要があると思う。

「水のかたち」を書き始めたころ、若い頃に世話になった店から電話をいただいた。戦後、北朝鮮から38度線をこえて逃げてきた半世紀の手記があるので読んでくれないか？の内容だった。当時30歳そこそこの横田きゆうじさんは帆掛け舟で150人を連れ逃避行を敢行した。横田さんの奥様が86歳で生きておられて実際にお話をお聞きした。右へ行ったか、左にいったかで生死がかわる！ほんのちょっとした違いが人の一生を変えた。横田さんは朝鮮人を家族のように扱っていた。敗戦後の逃避行には朝鮮人が助けてくれたのだ……。

水はどんな形にもなれる。しかも流れている……

自分が与えられた場所でしっかり生きればいい！ ありのままでもいい。自分を自分以上に評価されたい…が普通だが。

「水のかたち」の主人公、志乃子にはそんなところがない。彼女は第二の人生に挑戦している。

中学2年生の頃、借金取りが家に押し寄せ、押入れにかくれ小説を読みふけた経験。父は女をつくり家をでた。母は睡眠薬をのみ親戚の家で自殺。親戚から直来のようにいわれたが行かなかった。僕がそこに行くと母が死ぬ気がして行かなかった。その後、3、4時間後に母が助かったの知らせを受けた。丁度その時、井上靖の「あすなる物語」を読みふけていた。母が自殺した親戚の家のおばさんから電話があり、どうしてこなかったのか？…と詰問された。その時は判らなかったが、今思うと、「おかあちゃんはオレを捨てて自殺した。が、たまたま助かった。オレは捨てられた！の気持ちだったのだろう。井上靖の小説は素晴らしく、中二から高校生位までは、近くの叔父さんから手当たり次第に借りて読みふけた。大学時代は小説のことは忘れてテニスに没頭。就職し25歳で突然、パニック障害になった。乗り物に一人でのれない。めまいや動悸がはげしく過呼吸。人ごみを歩けない、会議がダメ。サラリーマンが出来なくなった。

あるとき突然、雨が降ってきて雨宿りに地下街の本屋に入った。純文学雑誌を立ち読みした。30、40枚の有名作家のものだったが面白くなく読めなかった。理屈ばかり…の内容で人になんの力も楽しみも与えられない内容だった。その時、小説家になろう…と思った。自分なら面白いものが書けると思い妻に電話した。妻から、やってみたら…と言われ背水の陣で小説を書き始めた。心の病気には30年の歳月がかかった。パニック障害のお陰で作家になれたのだ……。

小説は始めに、風景が思い浮かびあがる場合と、風景も人物も浮かんでこないが大切な一行がガパンと出ることがある。20代から40代の初めまでは風景がないと小説が書けなかったここ4、5年 50を過ぎてきて「歳月の重み」「良き人々の連帯」が小説のテーマになっている。